



第四紀通信

Vol. 16 No.1, 2009



岩手・宮城内陸地震にともない発生した荒砥沢地すべり。写真右側の崖が主滑落崖で、その比高は最大約 150 m にもなる。
(佐藤 剛 撮影)

Vol. 16 No. 1

February 1, 2009

2009 年大会案内・・・・・・・・・・2	地球惑星科学連合法人化・・・・・・・・15
地球惑星科学連合大会案内・・・・・・・・2	幹事会議事録・・・・・・・・・・16
学会賞等の推薦募集・・・・・・・・・・5	会員消息・・・・・・・・・・18
講習会報告・・・・・・・・・・6	生命の星・地球博物館企画展・・18
ワークショップ報告・・・・・・・・・・8	人事公募・・・・・・・・・・19
普及講演会報告・・・・・・・・・・9	信州大学山岳科学総研シンポジウム・
AsQUA2009 案内・・・・・・・・・・11	・・・・・・・・・・20

◆日本第四紀学会 2009 年大会案内 (第 1 報)

日本第四紀学会 2009 年大会が、下記の日程で実施される予定ですのでお知らせします。

詳細や発表の申込方法などにつきましては、次号の第四紀通信に掲載いたします。

開催期間：2009 年 8 月 28 日 (金)～8 月 30 日 (日)

開催場所：滋賀県立琵琶湖博物館 (滋賀県草津市下物町 1091)

日程：8 月 28 日 一般研究発表 (口頭及びポスター)・評議員会

8 月 29 日 一般研究発表 (口頭及びポスター)・総会・懇親会

8 月 30 日 午前：シンポジウム、午後：普及講演会

8 月 31 日 巡検

なお、シンポジウムは全て指名講演となっています。同日午後の普及講演会はシンポジウムと関連したテーマで行う予定です。

◆日本地球惑星科学連合 2009 年大会のお知らせ

日本地球惑星科学連合 2009 年大会が下記のとおり開催されます。第四紀学とその関連セッションに会員多数の参加と発表を期待します。以下は、日本地球惑星科学連合の大会ホームページ (<http://www.jpogu.org/meeting/index.htm>) より編集したものです。なお、日本地球惑星科学連合は 2008 年 12 月 1 日、これまでの連合を解散、改めて一般社団法人日本地球惑星科学連合となりました。これにともない、日本地球惑星科学連合への個人会員加入が呼びかけられています。2009 年大会は、会員であっても非会員でも参加できますが、参加費が異なりますのでご注意ください。会員登録については日本地球惑星科学連合のホームページ (<http://www.jpogu.org/>) をご覧下さい。

§ 1 2009 年大会の概要

●会期：2009 年 5 月 16 日 (土)～21 日 (木)
(6 日間)

●会場：幕張メッセ国際会議場
(〒261-0023 千葉市美浜区中瀬 2-1)

●各種受付開始日・締切日

■予稿集原稿投稿

2009/1/9 (金) より受付開始

～早期締切 1/30 (金) 17:00

～最終締切 2/6 (金) 12:00

※投稿規則が若干変更されています。詳細は、大会ホームページをご覧ください。

■事前参加登録

2009/1/9 (金)～4/10 (金) 12:00

●各種料金：

予稿集原稿投稿

早期投稿：1,500 円 / 1 件

最終投稿：3,000 円 / 1 件

図の掲載 (アップロード)：500 円 / 1 件

(図の掲載は希望者のみ)

参加費 括弧内は非会員の料金

<事前参加登録>

全日程 (一般)：11,000 (18,000) 円

全日程 (小中高教員)：4,500 (11,500) 円

全日程 (大学院生・研究生)

：5,500 (11,500) 円

24 時間 (一般)：5,000 (12,000) 円

24 時間 (小中高教員)：1,000 (8,000) 円

24 時間 (大学院生・研究生)

：2,000 (8,000) 円

※事前参加登録の変更・取消については大会ホームページをご覧ください。

<当日参加登録>

全日程 (一般)：13,000 (20,000) 円

全日程 (小中高教員)：6,000 (13,000) 円

全日程 (大学院生・研究生)

：7,000 (13,000) 円

24 時間 (一般)：6,000 (13,000) 円

24 時間 (小中高教員)

：3,000 (10,000) 円

24 時間 (大学院生・研究生)

：4,000 (10,000) 円

●各料金の支払方法 (個人) については、オンラインシステムによるクレジットカ

ードでの支払いとなります。詳細は大会ホームページをご覧ください。

§ 2 開催セッションのご案内

2009 年連合大会で設定されているセッションは、これまでどおり、レギュラーセッション、スペシャルセッション、ユニオンセッション、一般公開プログラム、国際セッションからなります。昨年度まで第四紀学会として提案した第四紀学関連のセッションは、今年度も引き続いてレギュラーセッションとして設定されています。それらは、『第四紀』、『沖積層研究の新展開』です。また、その他にも数多くの第四紀学関連のセッションがあります。ふるってご参加ください。

●開催セッション一覧

アンダーラインは、国際セッションです。国際セッションは全ての口頭発表を英語で行ないます。外国人研究者が参加しやすくすることで、日本の地球惑星科学の研究活動を世界に周知し、国際交流を促すことを目的としています。

■ A 一般公開プログラム

- ・ 高校生によるポスター発表
- ・ 地球・惑星科学トップセミナー
- ・ 地球惑星科学の教育とアウトリーチ
- ・ ジオパークー地球科学がつくる持続的な地域社会ー

■ U ユニオンセッション

- ・ 地球惑星科学分野における大学院教育とキャリア形成
- ・ 地球惑星科学の進むべき道 3：地球惑星科学コミュニティ現状と将来
- ・ 気候変動予測の最先端
- ・ 古環境科学の統合と地球環境の将来予測

■ レギュラーセッションおよびスペシャルセッション

B (地球生命科学セッション)

- ・ 生命ー水ー鉱物相互作用
- ・ 地球生命史
- ・ アストロバイオロジー：宇宙における生命起源・進化・分布と未来
- ・ 化学合成生態系の進化をめぐって

C (地球化学セッション)

- ・ 固体地球化学・惑星化学
- ・ 断層帯の化学
- ・ 地球化学図の新展開を探る：環境、資源、研究、教育
- ・ 地球化学手法による顕生代のグローバル環境変動解析

D (測地学セッション)

- ・ 重力・ジオイド
- ・ 測地学一般
- ・ 地殻変動
- ・ 合成開口レーダー

E (地球電磁気学セッション)

- ・ 太陽圏・惑星間空間
- ・ 宇宙プラズマ理論・シミュレーション
- ・ 電気伝導度・地殻活動電磁気学
- ・ 地磁気・古地磁気
- ・ 磁気圏ー電離圏結合
- ・ 宇宙天気
- ・ 電離圏・熱圏
- ・ 大気圏・熱圏下部
- ・ 磁気圏構造とダイナミクス
- ・ 国際宇宙ステーション (ISS) きぼうによる宇宙地球環境計測
- ・ 地球及び惑星における全球電流系と雷放電関連現象
- ・ 地圏ー大気圏ー電離圏結合

F (大気・海洋学セッション)

- ・ 大気化学
- ・ 成層圏過程とその気候への影響

G (地質学セッション)

- ・ 地域地質と構造発達史
- ・ 堆積物・堆積岩から読みとる地球表層環境情報
- ・ 放射性廃棄物処分と地球科学
- ・ 変形岩・変成岩とテクトニクス
- ・ 地球年代学・年代層序学
- ・ 西太平洋のガスハイドレートとメタン湧水
- ・ 地球掘削科学
- ・ 地殻流体ダイナミクス
- ・ 日本列島及び極東アジアの地質構造形成史
- ・ 地震断層の年代学：最近の新展開と今後の展望

H (水文・陸水・地下水学セッション)

- ・ 水循環・水環境
- ・ 同位体水文学 2009
- ・ 都市域の地下水・環境地質
- ・ 陸域・海洋相互作用ー物質循環と生態系との関係ー

I (地球内部科学セッション)

- ・ 地球構成物質のレオロジーと物質移動
- ・ 地球深部ダイナミクス：プレート・マントル・核の相互作用
- ・ 地球深部のダイナミクスと進化

K (岩石・鉱物学セッション)

- ・ オフィオライトと海洋リソスフェア
- ・ 岩石・鉱物・資源
- ・ 鉱物の物理・化学
- ・ 中性子散乱による地球惑星科学の新展開
- ・ 島弧進化 (海洋性島弧から大陸弧へ)

- L (地球環境・気候変動学セッション)
- ・ 古気候・古海洋変動
 - ・ 海と陸の気候ー過去から現代までの変動解明へのアプローチ
 - ・ 北極域の科学
 - ・ 地球温暖化防止のための CO₂ 貯留 (CCS) 等
 - ・ 低緯度域の気候変動と間接指標の開発
 - ・ 水文気象学と生物地球化学の連携

- M (地球惑星圏学セッション)
- ・ 惑星大気圏・電磁圏

- O (計測・探査技術セッション)
- ・ 物理探査のフロンティア
 - ・ 空中からの地球計測とモニタリング

- P (惑星科学セッション)
- ・ 惑星科学
 - ・ 宇宙惑星における固体物質の形成と進化
 - ・ 火星
 - ・ 太陽系小天体の科学
 - ・ 月の科学

- Q (第四紀学セッション)
- ・ 第四紀
 - ・ 沖積層研究の新展開

- R (鉱床・資源地質学セッション)
- ・ 資源地質学の新展開：レアメタル・レアアース資源を中心として

- S (地震学セッション)
- ・ 活断層と古地震
 - ・ 地震発生の物理・震源過程
 - ・ 地震活動
 - ・ 地震観測・処理システム
 - ・ 地震予知
 - ・ 強震動・地震災害
 - ・ 地殻構造
 - ・ 津波
 - ・ 陸域震源断層の深部すべり過程のモデル化
 - ・ 火山活動や沈み込み過程に伴う低周波振動現象
 - ・ 地震波伝播：理論と応用
 - ・ Global Collaborative Earthquake Predictability Research
 - ・ 首都直下地震防災・減災特別プロジェクト
 - ・ 強震 / 震度観測とデータの利活用

- T (地球惑星テクトニクス・ダイナミクスセッション)
- ・ テクトニクス
 - ・ 沈み込み帯プロセスと蛇紋岩
 - ・ 地震学と構造地質学における応力逆解析手法とその活用
 - ・ 連動型巨大地震
 - ・ プレート収束帯における地殻変形運動の統合的理解

- V (火山学セッション)
- ・ 活動的火山
 - ・ 火山・火成活動とマグマ
 - ・ 火山の熱水系
 - ・ カルデラ生成場のテクトニクスと噴火準備過程

- W (雪氷学セッション)
- ・ 雪氷学
 - ・ 雪氷圏と気候
 - ・ コア研究が拓く地球環境変動史

- X (地理学セッション)
- ・ 人間環境と災害リスク
 - ・ GIS (地理情報システム)
 - ・ 地考古学

- Y (防災・応用地球科学セッション)
- ・ 地質ハザード・地質環境問題
 - ・ 地すべりダムとせき止め湖：形成から発展、消滅まで
 - ・ 緊急地震速報：減災のためのさらなる進展を目指して

- J (分野横断型セッション)
- ・ 地震・火山等の地殻活動に伴う地圏・大気圏・電離圏電磁現象
 - ・ 断層帯のレオロジーと地震の発生過程
 - ・ 地球流体力学：地球惑星現象への分野横断的アプローチ
 - ・ 情報地球惑星科学
 - ・ 巨大地震発生帯の科学
 - ・ 海洋底地球科学
 - ・ 地球惑星科学における地図・空間表現
 - ・ 陸域の生物地球化学
 - ・ 地球科学史・地球科学論
 - ・ 活断層と地震災害軽減
 - ・ 逆問題解析の新展開～データからダイナミクスに迫る
 - ・ 地球情報の標準と管理
 - ・ 隕石解剖学
 - ・ 遠洋域の進化
 - ・ 御岳火山ー火山活動と群発地震ー
 - ・ I*Y (IGY+50) の成果と日本ーアフリカサイエ

ンス協力

- ・地震に関連する大気発光現象
- ・スラブ起源流体をさまざまな角度から理解する
- ・関東アスペリティ・プロジェクト：掘削とモニタリングに向けて
- ・サンゴ礁：生命・地球・人の接点
- ・地質媒体における物質移動、物質循環と環境評価
- ・小型科学衛星による宇宙科学の新展開
- ・日本海東縁ひずみ集中帯の構造とアクティ

ブテクトニクス

- ・結晶成長における界面・ナノ現象
- ・荒天候発生での地質－大気および地質－海洋相互作用
- ・反プレートテクトニクス：CMBの新たな理解に向けて

Z (その他セッション)

- ・地形
- ・環境リモートセンシング
- ・大気電気学

◆第四紀学会「学会賞」と「学術賞」の候補者推薦の募集について（再掲）

昨年から新設されました「日本第四紀学会賞」（以下「学会賞」）と「日本第四紀学会学術賞」（以下「学術賞」）の受賞候補者の推薦受付を開始いたします。両賞は来年6月末日までに、学会賞受賞候補者選考委員会が、推薦された候補者の中から、受賞候補者を選考し、評議員会において受賞者が決定され、2009年総会で表彰される予定です。

「学会賞」：第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動及び学会活動に貢献した正会員に授与。学会における最高の賞。毎年若干名。

「学術賞」：第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与。優れた編書、著書、論文などの一連の業績が対象。対象成果が複数の著者（研究グループ等を含む）によりなされた場合は、筆頭著者または代表者に授与。毎年若干名。

つきましては、第四紀通信の前号（15巻6号）に掲載しました「日本第四紀学会学会賞規定」及び「日本第四紀学会学会賞と学術賞選考に関する内規」をご参照の上、「学会賞」及び「学術賞」の候補者をご推薦いただきますよう、会員各位にお願い申し上げます。

1. 推薦書類：推薦書類には、推薦者名（自薦を含む）、賞の名称、「学会賞」の場合には候補者名及び具体的な業績や活動内容を示した受賞件名と推薦理由を、「学術賞」の場合には候補者名及び受賞の対象となる一連の業績を含めた受賞件名と推薦理由を記入する。
2. 推薦書類の提出先：
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町519 洛陽ビル3階
日本第四紀学会 学会賞受賞候補者選考委員会 宛
3. 推薦書類の受理期限 2009年3月31日（必着）

◆第四紀研究「論文賞」と「奨励賞」候補論文推薦の募集について（再掲）

今年度の「論文賞」と「奨励賞」の推薦を下記のとおり受け付けます。これらの賞は、規定により、会員の皆様から自薦・他薦によって候補論文と候補者をご推薦いただき、論文賞受賞候補選考委員会において受賞候補論文・受賞候補者の選考を6月末日までに行います。受賞論文と受賞者は、来年6月頃に開催予定の評議員会において決定され、2009年総会で表彰される予定です。

「論文賞」：会員を含む論文著者全員に授与。毎年1-2件程度。対象は、掲載された全ての論文（短報を含む）。

「奨励賞」：会員である筆頭著者に授与。年齢は選考年の4月1日で35歳以下。毎年1-2件程度。

つきましては、第四紀通信の前号（15巻6号）に掲載しました「日本第四紀学会学会賞規定」及び「日本第四紀学会論文賞と奨励賞選考に関する内規」をご参照の上、「論文賞」の候補論文と「奨励賞」の候補者をご推薦いただきますよう、会員各位にお願い申し上げます。

1. 選考対象：「第四紀研究」第46巻（2007年）及び第47巻（2008年）に掲載された論説、短報、総説、資料、講座及び特集号の論文。「論文賞」の場合には、著者に会員が含まれることが必要。「奨励賞」の場合には、筆頭著者が会員であること。
2. 推薦書類：推薦書類には、推薦者名（自薦を含む）、賞の名称、「論文賞」の場合には全著者名と候補論文名（巻号頁を明記）及び推薦理由を、「奨励賞」の場合には候補者名と推薦論文名（巻号頁を明記）及び推薦理由を記入する。
3. 推薦書類の提出先：
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町519 洛陽ビル3階
日本第四紀学会 論文賞受賞候補者選考委員会 宛
4. 推薦書類の受理期限 2009年3月31日（必着）

◆日本第四紀学会講習会

「縄文土器の製作技術と焼成に関する実験考古学」参加報告

上林 彰仁（京都教育大学大学院）

日本第四紀学会と東京都埋蔵文化財センター（以下、「都埋文センター」）共催の『縄文土器の製作技術と焼成に関する実験考古学』が、2008年10月25日（成形）と11月8日（焼成）の計2回にわたって、都埋文センターにて開催された。縄文土器の復元製作と焼成実験を通して、土器製作技術の内実を理解することを目的としたものである。二度に分けて行うのは、復元製作した土器は、焼成するまでの間、一定の乾燥期間が必要なためである。日本第四紀学会会員、考古学研究者、および学生などを対象とする本講習会の受講者は、考古学専攻の学生3名と、筆者の計4名であった。筆者は考古学を専攻してはいないが、生涯学習の一環に野焼き土器作りを組み込みたいとの希望をもって参加した。

第1回目は、13:00より都埋文センターの竹尾 進氏・山本孝司氏の指導のもと、復元土器の成形をおこなった。まず、多摩ニュー

タウン遺跡から出土した縄文時代中期の土器の中から、受講者各人が復元製作対象とする土器を一個体選んだ。続いて、そのレプリカを製作するために必要な、①当該土器の時代背景、②特徴、③製作難易度、などに関する説明を受けた。説明の後、多摩ニュータウン遺跡採土坑で得られるものと同じ粘土に、砂を混ぜた胎土が用意され、これを輪積み法により成形する作業を開始した。

この復元製作の作業を通じて、いくつもの知見を得た。たとえば、個々の粘土紐を作るにも、復元対象とする土器と比較しながら粘土紐の太さを考えつつ製作する必要がある、これは予想したよりはるかに難しい作業であった。今回の講習会では、対象土器の忠実な復元作業の実践を通じて、土器製作に関する技術知の一端を具体的に理解していくことに意義があると考えているので、以後の作業はこの点に努めて注意した。このほかにも、対象土

器と同様の器形に仕上げることは思いのほか難しく、他の受講者もこの点は特に苦労している様子であった。

また、土器成形は時間との勝負で、積み上げ作業があまりにも長引くと、紐どろしの接着が甘くなってしまい、焼成時（あるいは焼成前の乾燥時）にその部分から割れるおそれがある。経験の浅い受講者にとってこの点がかもっとも危惧されたが、全員が約3時間でどうにか成形作業を終わらせることができた。

この後の施文作業においては、まず復元製作対象とする土器の文様を観察して、施文具を選び出し、施文順序・施文方向等を考えねばならない。特に施文具の選定・施文方向の読み取りが難しく、受講者のうち、縄文土器を専門に研究している学生以外は、講師の方の説明をうけながら理解を深めていった。受講者の多くは時間内に作業を終わらせたが、筆者は隆帯の貼り付けまでで時間切れとなり、やむを得ず残りの縄文の施文は講師の方のお願いして京都への帰路に着いた。

第2回目は土器の焼成である。筆者は朝9:00頃、小雨が降る中、再び都埋文センターを訪ねた。既に2~3名の職員の方々が、センター本館に隣接する「遺跡庭園」内の土器焼成場（広く浅い円形の‘穴’で直径3m強、深さ10cm程度である。以下、「焼成場」と略記）を、焚火で熱していた。焼成場の地面から水分を飛ばさなければ、土器焼成に必要な十分な火力が得られないため、との説明をうけた。絶えず薪をくべながらの2時間以上に及ぶ焼成場の予熱がおこなわれ、しばらくの間、地面からは白い蒸気が昇っていた。燻るオキを焼成場の中に均一に広げた後、2週間の室内・日陰乾燥を経た土器に予熱を施した。焼成場の円周を囲むようにして土器を並べ、数分~十数分おきに器を180°回転させながら、土器の内側・底面を含め器面全体が淡い紫色を呈するまで熱を与えていった。

昼食をはさみ、土器を焼成場の中心へと置き本格的な焼成過程に移る。細長く裂いた薪と小さな端材を、土器が見えなくなるくらいまで大量に投入すると、10分ほどの間、2mを越える炎があがり、焼成場を囲むトチノキやクルミの木々が煤で黒ずむほどであった。土器の破損を危惧しながら待つ30分余の時間は、とても長く感じられたが、幸いにも受講者全員の土器が割れずに無事焼き上がった。この成功は、土器を観察しながら予熱の具合を確認し、さらに薪の配置、火力を左右する薪の量を適切に判断しながらの焼成作業の賜物である。この点を実感するとともに講師の方々の経験知には深い感心を覚えた。こうした点にこそ実験考古学の意義があるのだ

ろう。

本講習会の受講者数は予定よりも少なかったが、文献からは得られない貴重な知識・経験を得ることができる貴重な機会である。より多くの方の参加が望まれる。なお、講習会では多量の粘土、燃料材、そして多くの時間や人手を必要とした。計2日にわたる講習の準備と、丁寧かつ細やかな指導をいただいた東京都埋蔵文化財センター職員の皆様に、厚く御礼申し上げたい。



成形



焼成のようす



焼成のようす(続き)

◆「第四紀中・後期の年代的枠組みを理解するためのワークショップ」の報告

表記のワークショップが2008年12月25日(木)13:00から26日(金)16:30まで、古気候変動研究委員会とテフラ・火山研究委員会の主催、信州大学理学部の後援で、信州大学理学部において開催された。その趣旨は、日本の第四紀後半の気候変動の解明にとって編年の軸が十分に精度良く定まっていないという大きな問題に対して、現時点での到達段階と課題を明確にして次に進む一つのステップとすることであった。

^{14}C 年代測定の課題では、中村会員がAMS年代測定法の最近の進歩をレビューし、技術的な進歩により30年以下の誤差となる高精度化が達成されていること、微量で測定できる利点が活かされた幅広い利用が進んでいること、ウィングルマッチングやIntCal04などのデータセットの充実により確度が高まっていることが紹介された。特に、IntCal04やNotcal04の違い、日本周辺の海洋リザーバー効果などにも言及されて、参加者の理解を深めた。また、工藤会員よりドイツ・ケルン大学のグループが作成した「CalPal2007Hulu」という較正プログラムの詳しい紹介があり、6万年前までについての一貫した較正が可能であること、Fairbanksらの提案も取り込んだデータ密度の高い較正であること、Hulu洞窟の鍾乳石のU-Th年代に対応させている点で放射年代値の裏付けがあること、実際に使ってみても適合性が高いと思われること、などの特徴が説明された。これらの内容は、第四紀研究誌の解説論文として投稿していただけることになったので、ご期待ください。

海洋酸素同位体層序については、大場会員から、Emiliani(1955)に始まる酸素同位体層序の成立史まで含めた各種の標準的な同位体層序の丁寧な紹介があり、また、最新の同位体層序LR04(Lisiecki and Raymo, 2005)についても詳しく解説された。有孔虫殻の酸素同位体比を左右する要因はいくつもあり、深層水に生育する底生有孔虫殻がもっとも適切な試料ではあるが、使われる種や個体ごとの差異がある。太平洋からの資料は少ないが、底生有孔虫殻の資料の57サイト分をスタックしたLR04の信頼性は高く、氷床コアの水素同位体比や酸素同位体比の変動ともよく一致し、5.5Maまで遡る点でも有用である。

テフラについては長橋会員がほぼ第四紀全体をカバーする主要広域テフラの対比を紹介し、その間に位置してある程度の範囲をカバーする準広域テフラの重要性を指摘し

た。青木会員は北西太平洋海域に分布するテフラの対比について、海洋におけるテフラ同定の困難さを指摘しつつ、基礎となるデータベースの整備、それにリンクさせて統計的手法を援用した対比の方法論、海洋酸素同位体層序の上にテフラの層準を明確にすることの意義などを紹介した。また、テフラの同時性を鍵として精密な時間編年を目指す「Japan-INTIMATE」といった取り組みが必要でないか、という指摘もなされた。

極地研の川村氏による講演では、まず南極氷床の概要、南極氷床とグリーンランド氷床および海洋などの全球的な変動とのリンクについて説明された。氷床の年代指標として氷床コア中の気泡の O_2/N_2 比が新しく用いられ、従来の流動モデルに基づく年代では5000年ほどの誤差があったものが、2000年程度に改善されたことが画期的である(Kawamura et al., 2007)。気泡中の O_2/N_2 比は周囲の氷結晶の粒径に依存しており、結晶の大きさは降雪あった時代の日射量はその成長を決定するので、南極の日射量変動とリンクさせて、orbital turning できることが利点となっている。南極と北極のシーソー関係や各種の気候変動指標間の比較を中心とした最新の研究動向の紹介は大変刺激的であった。

以上のような基調となる講演をベースにして、下に示したような講演やポスター紹介なども交えて情報を共有した。その中で、年代軸の確立を課題とした今後の研究の展開を議論した。汎世界的な同時性をもった時間軸を一気に確立するという課題は重すぎる、多数認定できるテフラを活用して日本周辺におけるローカルな「標準層序」を作り上げることが確実な道ではないか、そのためには陸域の湖沼や沿岸海域の堆積物・年輪といった素材を用いた「模式層序」(その候補)をいくつも作りあげていく作業が必要である、海洋を介した国際対比には海洋のリザーバー効果の見積もりが障害となって困難さが大きいのではないか、物理・化学的な指標の経年的変動を直接に氷床年代やHulu鍾乳石年代へ対比させることが近道ではないか、といった意見が出された。今後ともこのような議論の場を発展させていきたい。

以下にポスター発表を含む講演タイトルと講演者をリストしておく。

公文富士夫(信州大・理)「ワークショップの趣旨説明：手軽に使える年代軸が欲しい理

由」
 中村俊夫（名古屋大学年代測定総合研究センター）「 ^{14}C 年代測定法の課題と最適の利用方法」
 大場忠道（北大・名誉教授）「有孔虫殻に基づく海洋酸素同位体層序の現状と課題」
 長橋良隆（福島大学・共生システム理工類）「近畿・中部地方に分布する更新統と完新統のテフラ層序」
 青木かおり（立正大・環境科学部）「指標テフラの海域への展開：北西太平洋海域における海洋酸素同位体層序上での指標テフラの層位」
 川村賢二（極地研）「南極ドームふじ氷床コアの年代モデルと気候変動～北半球の氷床変動とのリンク～」
 宮入陽介（東京大学）・近藤玲介（日本大学）「ルミネッセンス法を用いたテフラ年代測定の最近の進展」
 池原 研（産総研）「海域の火山灰の年代測定による海洋レザバターの時空間変動の検討」
 伊藤雄一郎（名古屋大学年代測定総合研究センター）「晩氷期の環境変動の年代的枠組みについて—人類史との対比という視点か

ら—」
 田原敬治（信大・院・総合工学系・山岳地域環境科学専攻）「湖沼堆積物中の有機炭素を用いた氷期—間氷期サイクルを巡る古気候変動の解明」
 伊藤拓馬（信大・院・総合工学系・山岳地域環境科学専攻）「長野市南部に分布する湖成高野層から産出する菱鉄鉱の形成周期—MIS5eにおける Dansgaard-Oeschger cycleの検出」
 伊藤拓馬（信大・院・総合工学系・山岳地域環境科学専攻）「木崎湖の湖底タービダイトに基づく中世温暖期（MWP）と小氷期（LIA）の堆積過程」
 岩本はるか（信大・院・工学系・地球環境科学専攻）「熊本市西部金峰山地域における中期更新統の全有機炭素分析からみた古環境変動の復元」
 市川 博（信大・院・工学系・地球環境科学専攻）「青森県下北半島沖の海底コア試料に基づく更新世中・後期の古海洋環境の復元」

（古気候変動研究委員会 公文富士夫）

◆ 2008 年日本第四紀学会普及講演会報告

2008 年 11 月 16 日（日）、国立科学博物館日本館 2 階講堂において 2008 年日本第四紀学会普及講演会を開催した。当初目的とした中学生や高校生の参加は残念ながら少なかったが、約 100 名の参加者があり、盛況であった。会場の使用を許可していただき、さまざまな便宜を図ってくださった国立科学博物館及び国立極地研究所に対し、深く感謝いたします。以下に、報告に代えて、講演会に参加した首都大学東京都市環境学部地理環境コース 3 年生の青木 拓さんによる参加報告の感想文を掲載します。

（担当 三浦英樹）

『極限のフィールドワーク—南極観測から分かる地球環境変動の過去と未来—』参加報告

首都大学東京 都市環境学部地理環境コース学部 3 年生 青木 拓

先日行われた『極限のフィールドワーク—南極観測から分かる地球環境変動の過去と未来—』に参加し、日本が南極で行っている調査の内容や調査時の苦労話などを聞くことができた。以下に記すのは講演を聴いた感想である。

講演会の案内情報には、大人から子供まで楽しめると書いてあり、実際の発表も小学生でもおおよそ分かるような、そして楽しい講演であった。気軽に聴ける雰囲気のためか、3 時間という時間はとても早かったように感じる。また、会場で南極の氷に触れる機会があり、貴重な体験ができたと思う。6 名の方による発表は、各人の調査内容について語る形式となっており、南極におけるフィールドワークの多様性を知ることが出来た。

奈良女子大の高田先生による『南極の自然環境と野外調査（フィールドワーク）：探検から研究観測へ』を聞き、南極には西南極と東南極があり、ニュースで聞く南極とは主に西南極であることを知った。また、西南極に情報拠点が集中する中で、日本の調査施設はい

ずれも調査が困難な東南極に存在することを知り、日本の調査隊の過酷な環境の中でも研究を遂行し続ける強靱さと熱意を感じた。

極地研の福井先生による『南極の氷を掘ってなにがわかる？：約 1000km の距離を時速 10km で移動。気温マイナス 40 度の世界で、3035m の長さの氷の柱を掘り出す理由』を聞き、日本の調査隊はドームふじにて、氷床コアを 3035m まで掘削したことを知った。以前、大学の授業をつうじてグリーンランドで氷床コアを掘削するビデオを見て、掘削には長期間を要することや過酷な環境での作業というものを見たことがある。南極でも同様の苦勞の末に 70 万年前までの気候の情報が詰まった氷床を掘削したという説明を受けた。

広島大の前杵先生による『南極の砂浜を掘ってなにがわかる？：削岩機で掘っても一日わずか 15cm！コンクリートのような永久凍土に深さ 4m の穴を掘り、スコップで砂浜に長さ 200m の横穴を掘る理由』を聞き、南極では多くの機材を用いて物々しい調査ばかりしている（氷床コアの掘削など）と思っていたが、スコップのみを用いる調査もあることを知り、調査の幅が広いことを知った。

どの発表を聞いても南極での調査は過酷であるが、過去から未来を知る為の情報が多く詰まった絶好の調査地を研究することへの意義を感じた。また、そのような過酷な調査の中でも、辛いことばかりではなく、ペンギンやアザラシといった動物のかわいらしい姿を見るという調査中の楽しみ的一面も垣間見ることが出来た。機会があれば一度は南極に行ってみたいと思わせる講演であり、楽しむことが出来た。



講演会のひとこま（前杵英明撮影）

◆ AsQUA(Quaternary Research of Asia)2009 大会 第 1 回状

International Symposium on Paleoanthropology in Commemoration of
the 80th Anniversary of the Discovery of the First Skull of Peking Man and
The First Conference on Quaternary Research of Asia
Beijing, October 19-23, 2009

FIRST CIRCULAR

Dear colleagues,

In commemoration of the 80th anniversary of the discovery of the first skull of Peking Man, the International Symposium on Paleoanthropology and the First Conference on Quaternary Research of Asia will be jointly held in Beijing, October 19-23, 2009. Special session “Suyanggae and Her Neighbors” and the Asian Paleolithic Association’s annual meeting will be held during the symposium. The organizing committee warmly invites colleagues and friends around the world to join the symposium. The theme of the symposium is: Human Evolution in Asia and Environment Changes. Both oral and poster contributions are welcome. Scientific sessions on the following topics will be organized:

1. New discoveries of hominid fossil and Paleolithic sites
2. Origin and evolution of humans in Asia
3. Migration and cultural interactions between east and west in Pleistocene
4. Interaction between geological environmental changes and human activities
5. The 80th Anniversary celebration of the foundation of the IVPP

Persons interested in attending the symposium are kindly asked to fill in the FIRST CIRCULAR REPLY form and return it before Jan.31, 2009 to the secretariat via email ([kjc\(at\)ivpp.ac.cn](mailto:kjc(at)ivpp.ac.cn)), fax (+86-10-68337001) or normal mailing address:

Institute of Vertebrate Paleontology and Paleoanthropology
Xiwai Street 142, Beijing 100044, China

Sponsors:

Institute of Vertebrate Paleontology and Paleoanthropology, Chinese Academy of Sciences

Chinese Association for Quaternary Research

Institute of Geology and Geophysics, Chinese Academy of Sciences

Organizing Committee:

Chairman: Ding Zhongli

Vice Chairmen: Wu Xinzhong, Liu Jiaqi, Zhu Rixiang, Gao Xing

Members: Chai Yucheng, Ding Zhongli, Fu Bojie, Gao Xing, Guo Zhengtang, Han Jiamao, Hou Yamei, Jin Changzhu, Liu Jiaqi, Liu Wu, Wu Xinzhong, Xiao Jule, Wang Youping, Yao Yupeng, Zhou Liping, Zhou Shaoping, Zhu Rixiang, A.

Derevianko, H. Kumai, Y. Lavrushin, Y. J. Lee, K. Okumura, Y.A. Park, Y. Saito, A.K. Singhvi, I. Takashi, A. Velichko, K.Y. Wei
Secretariat: Xiao Jule, Zhang Yi, Cui Ning, Che Jianguo

Arrangements of the Symposium

1. Schedule

October 19, 2009: Registration, Xiyuan Hotel, Beijing
October 20, 2009: Opening ceremony and scientific sessions
October 21, 2009: Scientific sessions
October 22, 2009: Mid-Excursion (Zhoukoudian Peking Man Site)
October 23, 2009: Scientific session and closing ceremony

2. Accommodation

The symposium will be held at Xiyuan Hotel which is close to the IVPP. The price at Xiyuan Hotel is estimated to be about \$ 40 per day for single and about \$70 for double (standard) room in the wing building and about \$ 100 in the main building.

3. Registration

Registration fee will be \$400 for formal participants, \$250 for students and accompanying persons. The registration fee will cover the symposium documents, meals and mid-excursion.

4. Post-symposium excursion

We are planning to arrange two post-symposium excursions that are still under consideration. The tentatively excursion routes are as follows:

Route 1 (about 3 days): Nihewan Paleolithic Site (Yangyuan county, Hebei), Xujiayao Paleolithic Site (Yanggao county, Datong, Shanxi), the Huayan Monastery of Datong and the world cultural heritage-Yungang Grottoes (Datong, Shanxi).

Route 2 (about 4-5 days): Guangxi Bose Basin Paleolithic sites, the karst landform and Detian waterfall near the China-Vietnam border.

The post-symposium excursions will be decided in the second circular according to the responses, so we welcome any comments and suggestions for our proposed arrangements.

5. Call for Abstracts

All prospective participants are asked to submit an abstract in English (within 1 A4 page) no later than July 1, 2009. The abstract should include: title, authors' names (capitalized family names), their institutions and addresses, and main-body of abstracts (see example below). The abstract should be submitted 1.5 spaced in 11-point, Times New Roman font, with 2.5 cm margins top, left and right, 2.0 cm bottom margin. Family names of

the authors should be in capitals. The email of the corresponding author must be included on the abstract. Figures are not permitted. The abstract should be created in, or converted to, Microsoft Word 2000 or 2003.

Preliminary Report on the Excavations of Shuidonggou Localities 3,4,5 in Ningxia

WANG Huimin¹, PEI Shuwen², MA Xiaoling¹, FENG Xingwu²

1. *Institute of Archeology of Ningxia Hui Autonomous Region, Yinchuan 750001;*

2. *Institute of Vertebrate Paleontology and Paleoanthropology, Chinese Academy of Sciences
Beijing 100044*

hmwang(at)gmail.com

The Localities 3, 4 and 5, which distributed in the southwest margin of the Shuidonggou basin, are the important localities of Shuidonggou site. These localities were not formally excavated since discovered in 1923. The three localities were excavated from August to October 2004, as a salvage archeological project due to the construction of the diversion channel of Ningdong Heavy Chemical Base. The excavations exposed an area of about 80 m². More than thousand of stone artifacts and ostrich egg fragments were excavated and collected from the three localities.

The upper cultural layer and surface lithic assemblage: a total of 928 pieces (479 from surface and 347 from layer ① of locality 4; 102 from upper layer and surface of localities 3,5) of stone artifacts were excavated and collected from the localities 3,4,and 5. More than 30% of blade and high percent of chert as the raw material is the main character. Preliminary analysis of retouched tools and technique as well as the stage of fossilization of ostrich egg fragments and extinction age of the ostrich in the region indicate that the lithic assemblage stage of localities 3,4 and 5 can be put to the end Upper Paleolithic to early Lower Neolithic of China.

The lower cultural layer lithic assemblage: about 85 pieces of stone artifacts were excavated from the layer ⑥ of the three localities, which seems more primitive in the cultural feature than the upper cultural layer by analyzing the type, morphology and technique of the stone artifacts. About 61.5% of the raw materials were dolomite, which shows similar to the Shuidonggou cultural of Upper Paleolithic in North China. Cores, flakes, blade and biface retouched tools are the main classes without typical microlith and levallois-style cores. The principal technique is direct hammer percussion with commonly core preparation, which the bipolar and soft-hammer percussion are seldom flaking technique.

FIRST CIRCULAR REPLY FORM

Family Name: _____ Given Name: _____ Country: _____

Gender: _____ Title: _____

Institution: _____

Mailing Address: _____

Telephone: _____ Fax: _____ Email: _____

Please insert **YES** or **NO** before:

_____ I want to receive the Second Circular

_____ I plan to attend the symposium

_____ I plan to give an oral presentation

(Provide the title of the presentation here, if possible)

_____ I plan to give a poster presentation

_____ I plan to go to post-symposium excursion **ONE**

_____ I plan to go to post-symposium excursion **TWO**

Suggestions: _____

◆日本地球惑星科学連合の法人化の報告

日本第四紀学会幹事会

日本第四紀学会が参加加盟団体であった日本地球惑星科学連合は 2008 年 12 月 1 日に、これまでの連合を解散し、改めて一般社団法人日本地球惑星科学連合となりましたので報告いたします。これまでの連合は単なる任意団体でしたが、法人化することによって国・社会レベルにおいて正式に認知される団体となり、社会的ステータスを確立します。また、法人化することにより、税制面で法的優遇措置がとられ、財政的基盤のしっかりした組織になります。こうした理由とともに、法人化の大きな目的として、(1) 日本における地球惑星科学コミュニティ全体を包括する連合体として、これまで開催して来た大会を基軸とした学術推進活動を一層引き上げ、活発な境界領域にまたがる学術推進活動の主体としての基盤を構築すること、(2) 地球惑星科学の面白さと重要性を国民や社会の中へ一層浸透させ、広い社会の理解を基に未来へつなげる人材と後継者の育成を計るための普及教育活動のしっかりとした基盤を構築すること、(3) 連合への加盟学協会に共通する課題、国際社会・日本社会から求められる様々な要請に対して、統一された専門家集団として機敏にかつ適切に対応するためのしっかりとした活動基盤と社会的認知を獲得すること、を掲げています。詳細については、下記のホームページを御覧ください。

<http://www.jpгу.org/hojinka/index.html>

昨年日本第四紀学会大会総会における 2008 年度の事業計画として承認されたように、日本第四紀学会も、連合法人化に伴い改めて団体会員登録を行い、日本地球惑星科学連合の加盟学会として、今後も関連他学会と協調して活動をすすめてゆく方針ですので、会員の皆様の御協力を御願いたします。

●日本地球惑星科学連合の会員登録のお願い

新連合体制の発足に伴い、日本地球惑星科学連合の個人会員登録を積極的にお願いたします。日本における地球惑星科学コミュニティ全体を包括する連合体として、地球惑星科学関連の多くの皆様の会員登録が必要となります。また、連合の会員になることにより国内外の学術情報がメール等を通じてリアルタイムに得られ、また大会参加費の割引などの特典を受けることができます。

会員登録は、以下のホームページから行うことができます。

<http://www.jpгу.org/meeting/entry.html>

個人情報登録（変更）では、連合の学術活動を展開する 5 つの学術グループ（セクション）から 1 つまたは複数を選んでいただけます。どのセクションに登録しても大会の全てのセッションに申し込みができます。今後はセクション主体の体制に移行しますので、各セクションの代表を選ぶ必要もあります。そこで、「登録区分」欄で、最初に代表を選ぶ選挙区に相当する「登録区分」を 1 つを選んでいただけます（選挙権は、各会員に 1 票のためです）。そのあとに「セクション」を複数選択するようになっていきます。

なんらかの理由で、非会員のままで大会に関する各種登録を希望される方は、「登録区分」の中から「非会員」という区分を選んでください。その場合でも、学術活動の場である「セクション」を 1 つまたは複数選んでください。

既に取得されている ID はそのまま新連合に引き継がれています。登録 ID をお持ちの方は、下の「個人登録（個人情報登録 ID をお持ちの方）」から連合の会員登録を行って下さい。

年会費については、一般が 2000 円となります。ただし、連合大会参加者は参加費との合計金額が 2008 年大会参加費と同額になるように設定されています。したがって、これまでに連合大会に参加されていた方々の実質的な負担はこれまでと変わりません。

大学院生及び定収入の無い研究生の会費は年額 1,000 円です（所定の手続きが必要です。2009 年 4 月 1 日から 2010 年 3 月 31 日までの間、大学院生及び研究生である方に適用されます。）

学部生及び高校生以下は会費及び連合大会参加登録料が無料です。

70 歳以上は連合大会参加登録料が無料です。

◆ 2008 年度第 3 回幹事会議事録

日時：2008 年 11 月 9 日（日）13:00 - 17:00
場所：日本大学文理学部 8 号館 1 階、レクチャー
ホール
出席：町田、遠藤、水野、百原、公文、鈴木、吾妻（春
恒社：中川、中野）

1. 活動報告

(1) 庶務

春恒社の第四紀学会担当者の変更（中川氏から
中野氏への変更）が報告された。前回の幹事会以
降の会員消息、寄贈図書、掲載申請が報告された。
国際地理オリンピック日委員会実行委員会より送
付された「2008 年国際地理オリンピック実施報
告」を閲覧した。

(2) 編集

第四紀研究 6 号は通常どおり刊行予定、2009
年 1 号は論文数が少なく、全体的に投稿数が少な
いことが報告された。2 号は特集号を予定してい
る。

(3) 広報

第四紀通信 15 巻 5 号は編集完了（表紙込 44p）
し、電子版は HP 掲載済で、郵送版も会員配布済
である。通信 15-5 にかかる編集書記アルバイト
時間に関する報告がなされた。ホームページの情
報掲載として主要なものは以下のとおりである。
第四紀学会シンポ『氷床変動とグローバルな気候
変動』、通信 15-5 電子版、他学会イベント掲載、
だいよんき QA、人事公募。学会・幹事会 ML 関
係では、第四紀学会会員メーリングリストに大き
な問題はなく、9 月 16 日以降、投稿が 19 件あっ
た。幹事会メーリングリストにも大きなトラブルは
発生していない。

(4) 行事

2009 年度大会の開催時期を日本地質学会の開
催日を考慮し、8 月 28 - 30 日に設定する方針と
なったことが報告された。

(5) 企画

10 月 25 日（土）に実施された講習会「縄文土
器の製作技術と焼成に関する実験考古学」に関す
る報告がされた。受講者：6 名（第四紀学会員 0 名）
であり、会員参加者が 0 名だったので、広報等の
再検討必要性が報告された。

2. 審議事項

(1) 富士学会からの科学的看板設置の協力依頼に
対し、第四紀学会として対応することになった。

(2) 学生会員の条件、名誉会員選考規定改訂、会
則改訂について審議した。学会賞・論文賞選考委
員候補者の推薦について審議した。選挙管理委員
会の設置に関して、候補となる委員について審議
した。

(3) 第四紀研究編集関連：執筆要項に一部矛盾し
た表記があったので幹事会承認で修正した。修正
後の執筆要項は第四紀研究 1 号に学会規約ととも
に掲載することになった。論文数減少に関連して、
年間発行回数について議論した。J-Stage からの第

四紀研究バックナンバーのアーカイブ化への勧誘
への対応について審議し、会員への周知が必要と
の見解に至った。今後の J-Stage 側との対応は編
集幹事が担当することとなった。

(4) 「大型植物化石（種実化石）の基礎知識と研究
法」（2009 年 1 月 24 - 25 日）について審議した。
評議員会・記念講演会・シンポジウム（2009 年 2
月 7 日）について審議し、記念講演会の世話人は、
庶務・企画・行事が担当することになった。

3. その他

次回日程について、12 月 21 日（日）に開催す
ることとした。

◆ 第 4 回幹事会議事録

日時：12 月 21 日（日）13:00 - 18:20
場所：日本大学文理学部本館 1 階 会議室 B
参加者：遠藤、水野、岡崎、百原、鈴木、荻谷、吾妻、
三浦、春恒社・中野

1. 報告事項

(1) 庶務

前回の幹事会以降の会員消息、評議員会への開
催通知の内容が報告された。

(2) 会計

会費納入の状況と督促について報告された。広
報書記のパソコン購入について予算雑費から支出
することを承認した。学会賞受賞者講演会の旅費
については今年度及び次年度以降も講演会・シン
ポジウム経費から出すことで確認した。

(3) 行事

2009 年第四紀学会大会および 2009 年地球惑
星科学連合大会の予定について報告があり、第四
紀通信に掲載することを確認した。2009 年第四
紀学会大会における普及講演会と受賞者の講演会
の両立が可能であるかどうか、大会担当者と引き
続き連絡調整することとした。また、2008 年の
普及講演会および大会会計収支について担当者か
ら報告があった。

(4) 広報

第四紀通信編集用パソコンの更新について、機
種選定、ソフトの内容が報告され、購入方法は担
当者の立て替え払いで至急進めることを確認した。
第四紀通信 16 巻 1 号の編集内容とスケジュール、
ホームページの管理・更新を行うこと、評議員会
用のメーリングリストの運用開始について報告さ
れた。

(5) 渉外

国際地球惑星年日本のホームページからの関連
イベントの登録の依頼とメーリングリストでの案
内を行うこと、地質の日のロゴが確定したこと、
連合の法人化と個人登録についてメーリングリス
トおよび第四紀通信での案内を行うこと、自然史
学会連合総会の開催について報告があった。学会
の法人化への対応について次回以降の議論を行う

こととした。

(6) 編集

第四紀研究の編集状況及び投稿状況、J-Stageのアーカイブの打ち合わせについて報告があった。J-Stageのアーカイブに関しての、著作権譲渡の告知方法と文章について、著作権譲渡時期の明記、アーカイブの内容についての紹介を加筆することで、承認した。アーカイブ上で公表するリストについて確認した（リストの1-8までは入れる、講演要旨と討論は除く、国際会議出席報告・感想、シンポジウムに伴う討論は入れる、掲載時に著者のE-MAILと住所は載せない）。この内容については、評議員会前に評議員会メーリングリストで、J-Stageへの参加の確認の覚え書きと告知文の内容の確認を行うこととした。J-Stage用のハードデスクの購入の必要性が報告された。

(7) 企画

1月24 - 25日の第四紀講習会について、担当者から現時点で15名ほどの申込みがあったこと、下見、学生アルバイト、光熱費の支出の予定があることが報告された。OIS3シンポジウムの準備状況について確認した。6月の研究委員会シンポジウムでの学会賞受賞者の記念講演会が可能かどうか、時間と場所について研究委員会代表の陶野さんに連絡して調整することとした。場合によっては、連合大会での開催も検討することとした。

(7) INQUA 関係

国際第四紀学会の日本招致委員会の開催の予定があることと2月の評議員会での報告の必要性が確認された。

(8) 第四紀 CD 出版関係

5月の地球惑星科学連合大会での完成を目標に鋭意作業を進めて努力をしていることを確認した。転載図表のうち、第四紀研究の図表の引用の一括転載許可することを確認した。

(9) 日本ジオパーク委員会

国内のジオパークの選定結果が公表されたことが確認された。

2. 審議事項

(1) 科研費審査員のデータベースの作成について

日本学術振興会に報告する科研費審査員のリス

ト作成のための、幹事会内での作業分担案の内容およびそれに基づく評議員会で候補者の選定依頼を行うことについて審議した。リスト作成作業については、次回幹事会までに行うこととした。

(2) 名誉会員候補者選考規定（案）について

名誉会員候補者選考規定(案)について審議した。選考基準についての幹事会の意見を集約して幹事会メーリングリストに流し、次回幹事会で最終決定することとした。

(3) 名誉会員候補者選考規定に関連する会則改定案について

会則規定については、前回の評議員会に提出した案を若干の修正（会費は細則へ、名誉会員の総会における立場、採決権について検討）のうえ、評議員会に提出することとした。これらの会則改定案については、次の総会に提出するため、事前の評議員会で審議するまえに、弁護士のチェックを行うこととした。

(4) 選挙管理委員の推薦

各幹事から選挙管理委員会の委員について推薦があり、すでに4名の内諾を得たこと、できるだけ東京近郊の候補者を中心に引き続き内諾をとることとした。

(5) ジオパーク委員会からの後援の依頼について

日本ジオパーク委員会での式典の後援について審議、承認した。

(6) 島根大学汽水域研究センター共同利用拠点化の要望書の依頼について

要望書の提出について審議、承認のうえ、要望書を作成することとした。

(7) 評議員会における作成資料の分担、内容について

学会賞、学術賞の推薦、論文賞の推薦については口頭での依頼のみとすることとした。学会賞選考委員会の選挙結果の報告、確定、開票結果について報告することとした。J-Stageアーカイブについては、アーカイブ化することを前提に、著作権譲渡の告知方法等について評議員会で審議することとした。

(8) 次回幹事会の日程

1月31日（土）13時から、会場は日大文理学部を予定。

**◆神奈川県立生命の星・地球博物館 2008 年度企画展
「46 億年の地球のしごと―地質写真家が見た世界の地形―」**

世界の各地には、驚いたり、感動したり、不思議だなど思うような地形や地層、岩石がたくさんあります。それらは地球がうまれてから 46 億年という長い時間の中で、できてきたものです。今回の企画展では、地質写真家 白尾元理氏が、世界各地で撮影した様々な地質景観の写真に、岩石、化石をあわせて「46 億年の地球のしごと」を紹介します。

[開催期間]：2008 年 12 月 6 日（土）～ 2009 年 2 月 22 日（日）

[料 金]：入場無料

http://nh.kanagawa-museum.jp/event/tokuten/2008_c_shigoto/index.html

◆神戸大学教員公募

募集要項

1. 募集人員：教授 1名
2. 所属：神戸大学 自然科学系先端融合研究環 都市安全研究センター リスク・アセスメント大研究分野・地殻破壊危険度評価研究分野
3. 応募資格：
 - (1) 地震学をはじめとする固体地球科学の分野で優れた研究業績があり、都市安全研究センターにおいて、リスク・アセスメント大研究分野・地殻破壊危険度評価研究分野を担当し、大学院理学研究科地球惑星科学専攻および理学部地球惑星科学科の教育・研究指導ができること。
 - (2) 専門分野において国際的な活躍が認められ、都市安全研究センターの国際貢献に積極的に寄与できること。
 - (3) 災害発生に伴う被災地現場調査および報告に積極的に寄与できること。
 - (4) 神戸大学および都市安全研究センターが掲げる地域貢献に積極的に寄与できること。
 - (5) 博士の学位を有していること。
4. 担当予定授業科目：理学部地球惑星科学科及び大学院理学研究科地球惑星科学専攻において地震学など固体地球科学関連授業科目を、また、全学共通授業において地球惑星科学関連科目および防災・減災関連科目も担当していただきます。
5. 着任時期：2009年8月1日以降できるだけ早い時期
6. 提出書類（各1部）
 - (1) 履歴書（最近の写真を貼付けし、現住所、連絡先（Tel、Fax、E-mail）、高卒以降の学歴、職歴、所属学会・協会、資格、受賞歴などを記入のこと）
 - (2) 業績調書（審査付き学術論文、著書、その他に区別して記載）業績の古い順に、全著者名、論文タイトル、雑誌名、巻、ページ、発行年を記載すること。
 - (3) 印刷・公表された主要論文の別刷りまたはコピー（5編以内）
 - (4) これまでに獲得した競争的資金（科学研究費など）のリスト
 - (5) これまでの研究経過・業績の内容（A4用紙2頁程度）
 - (6) 都市安全研究センター及び理学研究科における研究・教育の抱負（A4用紙2頁程度）
 - (7) 応募者について意見が伺える方2名の氏名と連絡先（E-mailを含む）
7. 公募締め切り：2009年5月8日（金）必着
8. 選考方法：書類選考の上、面接を行う。また、選考の過程でセミナーを行うこともあります。
9. 書類提出先：

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学 自然科学系先端融合研究環
都市安全研究センター長 有木康雄
電話：078-803-6226 FAX:078-803-6226 E-mail: ariki(at)kobe-u.ac.jp
都市安全研究センター・ホームページ：http://www.rcuss.kobe-u.ac.jp/
地球惑星科学専攻・ホームページ：http://www.planet.sci.kobe-u.ac.jp/

簡易書留とし、封筒の表に「都市安全研究センター・地殻破壊危険度評価研究分野・教授応募書類在中」と朱書きのこと。ご応募頂いた書類は返却いたしませんことをご了解ください。

神戸大学は、男女共同参画社会基本法の趣旨に則り、女性の方々の積極的な応募を歓迎します。

◆信州大学山岳科学総合研究所シンポジウム：「登山道の安全を考える」

白馬大雪渓や北アルプスの登山道に関わる関係者（行政・防災NPO・研究者ほか）にお集まりいただき、それぞれの立場から情報や意見を出し合ってください。そして安全な登山道のあり方について議論していきます。

■開催日 2009年2月21日（土）

■時間 10：00～17：00

■会場 信州大学理学部C棟2階大会議室

注：松本駅からバスでお越しの方は、「大学西門」（「信州大学前」の次）で下車し、掲示に従ってお進みください。駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください。

■入場無料・申込不要です。お気軽にお越しください。

■内容

- ・ 荻谷愛彦（専修大学）「趣旨説明」
- ・ 太田紘熙（白馬村長）「白馬村における登山観光の現状および課題」
- ・ 中野圭一（環境省長野自然環境事務所）「自然公園内の歩道（登山道の特性）」
- ・ 松本久志（長野県姫川砂防事務所長）「大雪渓周辺の土砂災害特性」
- ・ 富樫 均（長野県環境保全研究所）「白馬大雪渓上部、葱平付近の地質の特徴と崩壊との関連」
- ・ 小森次郎（日本大学）「国内における近年の土砂災害関連の登山事故」
- ・ 降旗義道（山岳遭難防止対策協議会）「2008年8月崩落事故後の登山道閉鎖と再開をめぐる経緯」
- ・ 山口 孝（涸沢ヒュッテ社長）「北アルプス南部における登山道管理の現状」
- ・ 新堀賢志（環境防災総合政策研究機構）「浅間山における登山者への情報提供実験－浅間山倶楽部ポータルサイトの運用に向けて」

■主催 信州大学山岳科学総合研究所 <http://ims.shinshu-u.ac.jp/>

★★★ 第四紀通信に情報をお寄せ下さい ★★★

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事：荻谷愛彦（[kariya\(at\)isc.senshu-u.ac.jp](mailto:kariya(at)isc.senshu-u.ac.jp)）宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月月上旬原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が出来た段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月15日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 専修大学文学部環境地理学研究室 荻谷愛彦

〒214-8580 川崎市多摩区東三田2-1-1 電話：044-911-1014 Fax：044-900-7814

広報委員：越後智雄・糸田千鶴 編集書記：岩本容子

日本第四紀学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr/index.html> から第四紀通信バックナンバーのPDFファイルを閲覧できます。

日本第四紀学会事務局

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町519番地 洛陽ビル3階

E-mail：[daiyonki\(at\)shunkosha.com](mailto:daiyonki(at)shunkosha.com)

電話：03-5291-6231

FAX：03-5291-2176